

第20回 ダイワハウスコンペティション 作品募集

テーマ

帰りたい家

あなたにとって帰りたい家とはどのようなものでしょうか。
もしくは、多くの人びとにとって帰りたい家とはどのようなものでしょうか。
これが今回のテーマです。

帰りたい。そう思える家にはさまざまな理由があります。
愛する人が待っている、愛着をもったものがある、
自分を取り巻く時間が蓄積された場所である、その家を包む風景に安心する。
本来家とは、信頼する人と共同体で暮らし、
もしくはひとりで自分を解放して明日の活力を生み出す、幸せの象徴です。

一方で、帰りたい家があるからこそ、人は夢をもって遠くへ行き、
冒険や挑戦をすることができるといえます。
なぜなら、帰りたいとは、家に対する希望や憧れ、
自らを称賛し肯定することも示すからです。
それは、自分が帰りたい家をつくるという当事者としての視点もあれば、
俯瞰的に帰りたい家とはどのようなものか考える視点もあるでしょう。

敷地は架空でもリアルでも自由です。戸建て住宅や集合住宅、併用住宅、
リノベーションなど、1棟でも複数単位でも形式やプログラムは問いませんが、
ひとつの家として必要な空間を提案してください。
自分の身体感覚を使い、また他者の思いにも寄り添った、
この先の種になる提案を期待します。

| 審査委員 |

審査委員長

青木 淳

建築家 AS

| 賞金 |

最優秀賞 (1点)
200万円 および記念品優秀賞 (2点)
各30万円 および記念品

審査委員

堀部 安嗣

建築家 堀部安嗣建築設計事務所
放送大学教授入選 (4点)
各10万円 および記念品
(以上、1次審査通過7作品)大和ハウス工業賞 (1点)
30万円 および記念品
(1次審査通過7作品より1作品選出)

平田 晃久

建築家 平田晃久建築設計事務所
京都大学教授佳作 (10点)
各5万円
※すべて税込み

小堀 哲夫

建築家 小堀哲夫建築設計事務所
法政大学教授

・大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。

・2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金額の配分を変える場合があります。

八田 哲男

大和ハウス工業 執行役員

登録・作品提出締切

2025年

10月15日(水)

消印
有効Daiwa House®
大和ハウスグループ

大和ハウス工業株式会社

本社 大阪市北区梅田3丁目3番5号 〒530-8241
東京本社 東京都千代田区飯田橋3丁目13番1号 〒102-8112
www.daiwahouse.co.jp

コンペについてのお問い合わせ

https://www.daiwahouse.co.jp/compe/

主催：大和ハウス工業株式会社

後援：株式会社新建築社



「帰りたい家」を考える



座談風景。左から、八田氏、小堀氏、堀部氏、青木氏、平田氏。

建築をつくることを前向きにとらえる

八田 ダイワハウスコンペティションは今回で第20回を迎えます。大和ハウス工業としてもこのコンペについて、さらにこの先を見据えた取り組みとして続けていきたいと思っています。前は「20年後へ」というテーマでさまざまな提案をいただき大変刺激を受けましたが、こちらの想定とは異なり、未来に対してシニカルな提案が多く見受けられました。今回は建築をつくることに対して前向きな提案が増えるテーマとしたいと思います。

司会 これまでもテーマを深読みした提案が多い傾向にあり、それは前回の「20年後へ」というタイトルを付けても同じでした。何をもって前向きと評するか難しいですが、今回応募者にどのような提案を期待しますか。

八田 私たちは家をつくる幸せを提供したいという思いをもっています。そこを追求できるテーマになるとよいと思います。「100年住宅」といわれる時代ですが、住宅は常に移り変わっていくものです。家をつくること、そこで起る暮らしをポジティブにとらえられるテーマを見出したいと思います。

堀部 八田さんのお話は、私がこのコンペを通して感じてきた違和感と重なるところがあると思いました。私たちはこれまで、応募者が本当にその家を快適だと思っている建築の提案なのかという人の生身の感覚に対する考えを問わずに評価していたところがあるのではないのでしょうか。とはいえ、アイデアコンペなので戦略を立てることは重要ですし、提案の斬新さが生身の感覚に繋がる種になることもあると思います。そう考えると、今回は住むということに対しての身体感覚と、若い人ならではの考え方や時代性、そして現在の社会背景が反映しやすいテーマがよいのではないかと思います。

小堀 他者と異なる発想やハッとする考え方の発掘がアイデアコンペの価値です。だからこれまで選ばれた案は、多数の応募の中でその発想に深い思考があるものでした。一方で、八田さんや堀部さんが指摘されたように、頭の中だけで考えてしまう提案が多い傾向もあり、実際に建築がどう成り立っているかを考えているかは疑問が残りました。堀部さんから生身の感覚を重要にするテーマをという言葉がありましたが、時間の流れも身

座談会参加

青木 淳 (建築家 AS)

堀部安嗣 (建築家 堀部安嗣建築設計事務所
放送大学教授)平田晃久 (建築家 平田晃久建築設計事務所
京都大学教授)小堀哲夫 (建築家 小堀哲夫建築設計事務所
法政大学教授)

八田哲男 (大和ハウス工業 執行役員)

体的な感覚に通じるところがあります。前回の「20年後へ」は時間をテーマに投げかけましたが、それをもう少し深掘りしてみるのはいかがでしょうか。

青木 これまでこのコンペを通して家に関するさまざまなテーマを考えてきましたが、ここ数年のテーマが抽象的過ぎたのかもしれませんが、たとえば、第18回で「笑う家」をテーマにした時は、当然楽しい家の提案がたくさん出てくると思ったのですが必ずしもそうではなかった。それは考えるべきことに抽象的な部分が多いと、どうしても自分の頭の中だけで考えてつくってしまい、堀部さんの指摘にあった、こんなところに住みたいとか、こういう家になつたらいいという自分の素直な感覚が抜け落ちてしまったからだと思います。アイデアコンペであっても批判や皮肉で終わっているのはもったいないので、そこにそれぞれの個人的な思いを入れてみると前向きな提案になるのかもしれませんが。

平田 僕としてはこれまで後ろ向きな提案を評価してきたつもりはありません。ただ、今までのテーマの抽象性が深読みに繋がっていたかもしれないので、もっと具体性をもったテーマの方がよいということは確かだと思います。この議論をきっかけに、このコンペが新しい展開にシフトできる可能性を探っていけるとよいですね。

物の論理と身体感覚

堀部 以前、このコンペの入賞者の学生と話していた時に、木が腐ることを知らなかったことに驚きました。そしてアイデアコンペとはいえ、物の論理を知らずに提案したものに価値があるのか疑問を感じました。かといって、物の論理だけで提案されても面白くない。無知な無邪気さではなく、物の論理をおさえたうえでの飛躍ある提案を見たいです。しかし、物の論理やつくり方を考えることは学生が苦手とするところではあるのですが。

平田 堀部さんのお話はもっともだと思います。実際に建った建築を評価する時には物事の前提を無視した納まりを承認するべきでないとも僕も思います。一方でアイデアコンペの羽ばたきのような可能性を評価したいので、

そのバランスは悩ましいです。提案の中に何かハッとさせられる視点が存在することを感じれば、仮に提案の中に物の論理に外れたことが含まれ、何らかの注釈を加える必要があるとしても、そこに含まれる輝きを高く評価してもいいのではないかと思います。知識のみで競うのではなく、アイデアとして競える自由さは大事だと思うのです。

堀部 たしかにバランスですね。



平田 物の論理ということでは、建築のつくり方に関心があります。たとえば自分ひとりで家をつくるにはどうしたらいいかと考えた時、具体的な工法はもちろん、プロセスやその前提となる材料や場所性にも考えが及ぶでしょう。どこから家というものが生まれ、誰とどのようにつくるのかを応募者と一緒に考えることができれば、家とは何かまで思考できて面白いと思います。しかし具体性がないと概念的な話に終始してしまうのでテーマになりません。建築の具体的な提案を考える人が多ければ多いほど、コンペを通して新しい何かが生まれる可能性があるように思います。

青木 テーマづくりにおいて、誰でもとっつきやすく、提案を出しやすいことは重要です。今、平田さんが指摘されたことは一言でいえば、「どこから家になるのか」という哲学的な問いで非常に面白い話ですが、そのままテーマにするとなかなか答えが出せない人が多くなるという懸念があります。そこで、「どうつくるか」ということをテーマの主眼に据え、たとえば工場やオフィスビルなど家としてつくられていないものを家に変えるリノベーションやコンバージョンを課題とするのはどうでしょうか。既存の建物を自分で選び、そこに何か手を加えて家にするという条件にするとかなり具体的な思考が要求されると思います。

八田 私が若い頃は住宅のリノベーションは一般的ではありませんでしたが、今は当たり前のもので、かつ建築の可能性を広げると感じます。自分もやってみたいと思うし、家を生き物のようにとらえる考え方も興味があります。ただあまり具体的に導きすぎるとアイデアの広がりがなくなってしまうので、その塩梅は難しいです。このような提案を求めるという道筋を立てるのはいいですね。このコンペの応募者は若い人が多いので、当然「家をつくる幸せ」とは何かまだよく分からないのではないかと思います。それでもこれまでの人生や過ごしてきた時代背景を反映し、「家をつくる幸せ」を考えるきっかけとなるテーマがよいと



思います。幸せを追求するということはなかなか答えが出ない永久的な問いですが、それでもコンペ慣れしてる人はそれなりの戦略を練ってくるだろうし、私たちの想像を越えた案を選びたいです。

小堀 応募者が頭でっかちに考えてしまわないようにするためには、具体的な思考を求めることに加え、自分ごとにとらえられるテーマであることが必要だと思います。私は、住宅がどのような時間を経ていくべきなのかということに興味があるので、たとえばいずれリノベーションすることが設計の段階で決まっている家のように、家を長続きさせようとするとどのような仕組みやつくり方が生まれるかを具体的に考えるテーマとして、「三代目の家」や「移り変わる家」はどうでしょう。

青木 自分ごとは大事な視点ですね。学生に住宅の設計をさせた時に「君はその家に住めるのか」と質問すると「考えていませんでした」と返ってくることがありましたが、それではダメだと思います。やはり自分自身がそこに住みたいと思える家を考えるのが住宅設計の基本です。ただ、他人の家を自分ごとを考えるのは一段レベルが高いと感じるので、少なくとも自分が住めるという条件はあった方がいいと思います。

小堀 しかしながらテーマを単に自邸とすると、自身の感覚のみで自分ではこれでよいからと割り切ってしまう人もいるかもしれないので、そこにどうやって他者を共存させるかということは重要なポイントだと思います。

堀部 応募者に身体感覚を発見してもらおうとすると、もっとも手取り早いのは自邸の設計だと思いますが、それだと小堀さんが指摘されたように若い人の身体感覚を中心に設計してしまうという危険性もある。そこで「終の住処」をテーマとするのはどうでしょうか。説得力のあるプランを提案する学生は、多世代で住んでいることが多い印象があります。祖父母や子供など自分とは異なる身体感覚をもつ他者と共生することによって、他者がどのような行動をして、どんなことを考えているのかを知らず知らずのうちに把握しているのだと思います。また「終の住処」としての自邸を設計すると、数十年後に自分がどうなっているかというところまでイメージすることを促すと思います。数十年後は自分も今と違う他者になるので、ひとり住まいだとしても、他人と自分の身体感覚を共存させる思考を導くことができるテーマだと思います。

帰りたい家

堀部 「住む」の語源は「澄む」だといわれています。外出先で望まない出来事に直面した時に、家が心身をリセットできる場所としてあることは誰にとっても重要です。今は家の中にいてもさまざまな情報が大量に飛び込んできて、自分の人生にとって一体何が重要で必要なのか整理がつかない



まま生活をしていることが多くなっていると思います。「澄む」ことは自分の身体感覚を見つめることであるし、自分の暮らしや他者との関係を見直すことにも繋がるのではないのでしょうか。

青木 「透き通る家」とするともう少しイメージしやすいでしょうか。一方で若い人たちの話を聞いていると、家を心身をリセットするための場所としてとらえるというより、シェアハウスのようにさまざまな人や物と出会う場所としてとらえている人も増えていると感じます。それは現代における一種の共同体のあり方で、家で睡眠はとるけども、それにいちばんの重点があるわけではなく、自分の家が地域の交流のきっかけになることにウェイトがあるというイメージです。「澄む」という考え方も大切だと思いますが、人と人、人と物の新たな出会いが家で生じることにより発生する「澱み」のようなものが含まれるテーマもあり得るのではないかと思います。

平田 「澄む家」はとても深いテーマだと思うのですが、語源を知らない人にとっては、澱みとは反対の透明さをすぐにイメージするかもしれません。以前テーマにした「太っ腹な家」や「笑う家」のように、ちょっとしたカジュアルさも入れたテーマはどうでしょうか。たとえば、「帰りたい家」というのはどうだろうかと思いました。これまでの議論を踏まえ、心の解放もあり、家族に限らずさまざまな人や物と出会うためにそこに行きたいと感じる家というイメージです。

堀部 なるほど、それはかなり自邸的なテーマですね。

小堀 僕は現在自邸を設計しているのですが、まさに「帰りたい家」を目指しています。こんな家だったら帰りたいという希望は誰でももっているものではないのでしょうか。

青木 帰りたいの主語は「私」なので、今までの議論の中で出た自分ごとであるし当事者性がありますね。本来、家は帰りたいものですが、これがテーマとなると、どういうところにどうやって暮らしたいかを問うているのでイメージが広がります。帰る場所があること自体が幸せなので、「幸せ」という言葉を使わなくても、八田さんが指摘された「家をつくる幸せ」をとらえた提案も出てくるのではないのでしょうか。

平田 誰と帰りたいかということも内包しているかもしれません。あとはその家で誰が待っているかとか、自邸といっても自分だけが主語ではない可能性もあります。

青木 そうですね。多くの人にとっての帰りたい家、ということもあるかもしれません。素直でストレートなテーマなので、堀部さんが重視していた身体感覚で設計することが必要になってきます。しっかりと考えを深めてアイデアを練ることは必要ですが、それだけではなく自分が住みたいと思えるような案を見たいですね。



応募者に期待すること

平田 何かが存在していることによって、そこにいること自体が楽しく、そこにいたいと思える場所に人は辿り着きます。その何かは、人や動物や物、時間の重なりやそこで起こる物事でもある。そこに向かう気持ちを「帰りたい」といつてもいいのではないかと思います。この気持ちは、現在家にいない人がもつものなので、家を客観視し、憧れを抱いているということです。そういった感情を自分の家にもつことはとても大事です。時には発想を捻りすぎず、スッと出す勇気ももってほしいですね。

小堀 このテーマに応えるには自分にとって家に帰りたいと思わせる根源は何かを考えることが必要だと思います。自分を取り巻く時間や記憶が蓄積した場所、愛する人や愛着をもったものが存在するなどさまざまなことが挙げられるかもしれません。かつ、住宅の本質的なところにタッチしないと身体性は得られないし、他者も受け入れられません。家に存在するものは何かという問いへ向き合った提案を見せてほしいです。

八田 その家で行われる暮らしを自分ごとにとらえ、自分自身を見つめ直して考えていただきたいです。「～したい」という希求する思いをテーマにしたものなので、建築をつくることを恐れない前向きな提案を期待します。

堀部 帰るという行為は必ず身体移動を伴うので、情報が身体移動を伴わずにどんどん入ってくる時代にこのことをじっくり考えるのはとても重要なことだと思います。何のために帰りたいのかということをおおげさに表現すると、自分の人生への称賛や肯定のようなことともいえるかもしれません。自分の心身を知って、自分が肯定される場所とはどのようなものなのかをよく考えてほしいと思います。

青木 人は帰りたい家があるから希望や夢をもって冒険や挑戦ができるのだと思います。帰りたい家があることは、人生の中で遠いところに行つて知らなかったものを経験してみたいという欲求と裏腹なので、帰りたい家をつくることでその家以外の場所やその人びとも肯定することになります。そういった意味で「好きな家」と「帰りたい家」は異なるでしょう。そして家単体としてではなく、それを包んでいる風景までイメージして見せてほしいです。新たな身体感覚の種を示す提案を期待しています。

